

## 2004年度 水資源・環境学会 研究大会のご案内

2004年度第20回研究大会を下記の要領にて開催いたしますので、ご案内申し上げます。

### 研究大会テーマ：水循環と自然再生

今年度の研究大会は、「水循環と自然再生」をテーマに開催します。今回は、2003年度研究大会テーマ「地域社会と水環境」及び同年度冬季研究会「河川政策から水循環政策への転換」の流れをふまえ、流域から国土や地球まで視野に入れ、量、質及び水循環を三位一体とする総合的な考え方や、水と密接不可分な自然再生に焦点をあて、21世紀の水資源や水循環の新しい方向を論じたいと考えています。

水資源・環境学会 研究大会事務局

### 目次：

2004年度 研究大会ご案内	1
研究大会プログラム	2
2004年度夏季 現地研究会のお知らせ	4
2003年度 冬季研究会ご報告	5
新規加入会員案内	6
事務局からのお知らせ	6

### [大会会場] :キャンパスプラザ京都(大学コンソーシアム京都)

〒600-8216 京都市下京区西洞院通塩小路下ル  
TEL:075 - 353 - 9100

[午前と午後、会場が変わります!]

午前 2階 第1会議室  
午後 2階 第3会議室

### [大会日時] :2004年6月5日(土)

10:30~17:00 研究大会

17:30~19:00 懇親会



(JR京都駅前・中央口を出て西へ200m、京都中央郵便局西隣)

## 【研究大会プログラム】

- .....
- (10:30) 開会  
 (10:30～12:00) 話題提供と対談 「水循環と自然環境」  
 仲上 健一（立命館アジア太平洋大学）  
 黒田 大三郎（環境省）
- (12:00～13:00) 昼食  
 (13:00～13:30) 総会
- セッション1「水環境と生活」**  
 (13:30～14:00) 洪水リスクマネジメント技法に関する一考察  
 徳島県吉野川下流域をモデルケースとして  
 水田 哲生（元立命館大学大学院政策科学研究科博士後期課程）  
 (14:00～14:30) 大仙陵池と狭山池にみる水環境再生施策の構図と課題  
 歴史地理学の視点から  
 川内 眷三（四天王寺国際仏教大学）  
 (14:30～15:00) 近世日本における魚附林と物質循環 若菜 博（室蘭工業大学）  
 (15:00～15:15) 休憩
- セッション2「水循環と自然・地域再生」**  
 (15:15～15:45) 琵琶湖沿岸域における自然修復・再生の課題  
 沿岸域管理の視点から 秋山 道雄（滋賀県立大学）  
 (15:45～16:15) 地域再生の視点からみた水環境形成の課題と展望  
 足立 考之（内外エンジニアリング株式会社）  
 (16:15～16:55) 総合討論  
 (16:55) 閉会  
 (17:30～19:30) 懇親会

## 2004年度研究大会 発表要旨

### セッション1

#### 洪水リスクマネジメント技法に関する一考察

- 徳島県吉野川下流域をモデルケースとして -

水田 哲生（元立命館大学大学院政策科学研究科博士後期課程）

我が国は世界でも稀な災害大国であり、さまざまな種類の自然災害が発生している。また自然災害とは言いきれないが、地球温暖化の影響により降雨の様態が変わってきている。したがって、これまでの災害対策のやりかたでは十全な機能を発揮することができないものも一部では見受けられる。洪水というリスクに注目したとき、従来どおりのハード手法によって災害の発生を防止する努力を続けることは当然だが、同時に、水害が発生した際の手当てを考える

必要が改めて注目される。そこで本研究では、水害リスクマネジメントについて取り上げ、金銭的な手段を中心とするソフト手法により「減災」を目指す。

#### 大仙陵池と狭山池にみる水環境再生施策の構図と課題 - 歴史地理学の視点から -

川内 眷三（四天王寺国際仏教大学）

伝仁徳天皇陵の周濠である大仙陵池周辺での都市化が著しく、灌漑用水池としての機能を喪失してほぼ40年が経過する。狭山池も水地下地域での、農業の他用途への著しい転用から、灌漑用水の需要は減少し、その役割を大きく低下させている。大仙陵池は二ヶ所の集水路より用水を取水し、西側の周濠池の除げより排水する構造になっている。農業用水路に生活排水が混入して著しく水質が悪化したため、1970年代初頭に宮内庁の要望で、集水路からの取水をとりやめ、雨水のみを貯留するようになった。やがて周濠池内の水が澱んで腐敗し、悪臭



が深刻な問題となり、こういった対策として、地下水を汲み上げパイプ管の設置によって浄水を導入し、濠水の水質保全に努めている。狭山池は、水地域域の洪水調節機能を目的にした「狭山池治水ダム事業」の大改修事業が施工され、2002年に全工事を完工する。この事業は同時に「狭山池ダム景観整備計画」として進められ、地域環境のなかに狭山池を位置づけたモデルづくりとして完成している。筆者の最近の研究は、記紀記載の依網池と狭山池の開削に焦点をあて、その復原と水利システムを分析してきた。こういったなかで百舌鳥古墳群の古墳周濠池が位置する土地条件に着目し、集水に困難を極めたことから、用水確保に努めた歴史的経緯をとらえる。大仙陵池をはじめとする百舌鳥古墳群の主要古墳の周濠は、集水を企図して狭山池用水との関係を模索し、嘗々と築いてきた歴史をもつ。歴史地理学の視点に立脚して、大仙陵池と狭山池の水環境再生施策の課題について提起する。

### 近世日本における魚附林と物質循環

若菜 博（室蘭工業大学）

日本における魚附林思想は1600年代初頭には存在していた。魚附林の背景には当時重要な産業資源（食料、肥料、灯油など）となっていたイワシ漁業育成の問題があった。1623年、佐伯藩（現在の大分県南部）の初代藩主・毛利高政の御触書（津久見六右衛門他宛）に「其浦組中山焼候事、当年より堅無用二候、其子細者山しけらず（繁らず）候へ八、いわし（鱈）寄不申候旨聞届候」との記述がある。つまり、津久見浦の山での焼畑、湾内の小島の草木の伐採などを固く禁じたが、その理由は「山しげらず候へば、いわし寄り申さず候」ということを聞き及んでいるからだという。毛利高政は1604年にはイワシの重要性を認識していた。

また、1897年（明治30年）制定の森林法で保安林として魚附林が設定されたのは江戸中期から明治初期までのサケ漁の振興策との関係があるとの指摘もある。

中・近世にはイワシは魚肥として内陸部に大量に投入された。サケは海の物質を内陸部に運ぶ「運搬者」でもある。海由来物質の内陸部への移動を図るために、日本近世の魚附林思想が展開したとも考えることができる。

### セッション2

#### 琵琶湖沿岸域における自然修復・再生の課題 - 沿岸域管理の視点から -

秋山 道雄（滋賀県立大学）

2002年に自然再生推進法が成立して、自然の修復や再生に対する関心が高まっている。今後、こうした方向での事業が展開するケースは順次出てくる可能性があるが、自然の修復や再生はこれまでの事業とは異なった性格をもっている。それを具体的に考察するため、本報告では琵琶湖沿岸域を事例に取りあげた。

沿岸域の修復や再生を考えていく際には、その生態的な構造や機能が大きいよりどころとなる。そこで、沿岸域をひとつのエコトーン（移行帯）とみることは、その性格を把握するうえで重要な意義をもつことになる。エコトーンの特徴を環境保全につないでいくためには、まず、沿岸域における自然生態系の成立プロセスとその性格を明らかにする必要がある。無機的自然のプロセスがどう展開したか、そこに生物がどう介在したかをおさえたい。人間の活動がエコトーンにあたえた影響を捉えていく。陸域と水域の接点にあるエコトーンは人間の活動の場としても重要な意味をもっていた。それだけに、沿岸エコトーンには長い人為的改変の歴史がある。

本報告では、こうした認識を前提として表題のテーマを考察していく。

#### 地域再生の視点からみた水環境形成の課題と展望

足立 考之（内外エンジニアリング株式会社）

20世紀が失った里山・里地や湿原、河川などの昔の姿を取戻すといった原風景復元の視点からみても、自然再生をめぐる動きは、生物の多様性重視だけでなく、まちづくりや地域再生の大きな原動力となって、盛り上がりを見せている。また、水と環境をめぐる諸問題は、都市、農村、森林、河川、沿岸域など個別の領域を超えた多様な広がりをもち、「流域圏」という発想をもとに水循環構築への新たな模索がはじまった。これらの動向を俯瞰しながら、本論では、生活、産業、環境維持、文化など「水の多様な価値」を検証するとともに、水環境を地域資源として活用した「水辺都市再生」や「農山村地域の環境創出」などの計画検討事例をもとに、「水と人のかかわり」の視点から環境再生のあり方について言及したい。

## 2004年度夏季現地研究会 長良川が育てた町 - 郡上八幡・美濃・岐阜 -

2004年の夏季現地研究会は「水環境とまちづくり」をテーマに、8月6日(金)～7日(土)、郡上八幡から美濃市、岐阜市にかけて見学します。徹夜踊りで有名な郡上八幡ですが、水と親しむ町としても大変有名です。初日は八幡の町の中を歩き、静けさの中に聞こえる水の音に耳を傾けてみたいものです。夜は郡上踊りを見学します。

二日目は車で長良川沿いを下り、「うだつのあがる町」「美濃和紙」で有名な美濃市、長良川とともに歩んできた岐阜市を訪れます。長良川が育てた町を訪ねながら、川との関係で作り上げられた地域の文化・歴史・風土を学び、現在のまちづくりに活かすことができると考えています。みなさまの積極的な参加をお待ちしています。

### 【スケジュール】

#### 2004年8月6日(金)～7日(土)

- 6日(金)午後 郡上八幡旧庁舎記念館 現地集合  
八幡市街見学  
夜 郡上踊り見学  
宿泊(吉田屋 岐阜県郡上市殿町160 Tel:0575-67-0001)
- 7日(土)午前 長良川沿いを下る  
美濃市(うだつの上がる町並み見学)  
午後 岐阜市(長良川沿いの河原町の町並み見学)

- 注) 1 宿泊所は予約済です(15名分)。  
2 参加申込者には後ほど詳細スケジュールをお送りします。

- 【費用】 18,000円(1泊2食代で、レンタカー等の各費用は含みません)  
\* 郡上踊りの時期にあたり、多少値段が高くなっていますことをご理解ください。

【申込み締切】 宿泊準備のため、下記の期日までにお申し込みください。  
**2004年6月30日(水)**

### 【問い合わせ・申込み先】

企画担当：伊藤達也(金城学院大学現代文化学部)  
電話：052-798-0180(代表)内線254  
ファクシミリ：052-799-2196  
E-mail：tito@kinjo-u.ac.jp

## 2003年度水資源・環境学会冬季研究会

## 『河川政策から水循環政策への転換』（2004年3月6日）報告

伊藤達也（金城学院大学）

今年の冬季研究会は「河川政策から水循環政策への転換」と題して、仁連孝昭会員（滋賀県立大学）に報告をいただき、秋山道雄会員（滋賀県立大学）にコメントをいただきました。参加者は17名ほどでした。

### 1. 仁連報告

まず仁連孝昭氏から「河川政策から水循環政策への転換」の題名で報告をいただきました。報告は「1. 背景、2. 水循環政策への転換の努力(1)印旛沼流域水循環健全化会議、3. 水循環政策への転換の努力(2)淀川流域委員会」を内容とし、現在、急速に変わりつつある我が国の河川政策を、政府審議会の答申を通して、また、流域レベルの委員会の現状を通じてご報告いただきました。

政府の河川政策がこれまでの内容から大きく変容しつつあることは、会員諸氏既にご承知のことと思います。しかし、実際に政府がどのようなスタンスで、どのような手法でもって既存の水資源政策、河川管理政策を変革しようとしているのか、また、どのあたりに目標を設定しているのか、については必ずしも明らかではありません。仁連報告ではそうした政府河川政策の転換を「河川政策から水循環政策への転換」である（べきだ）と捉え、自ら参加する淀川流域委員会を事例として報告しながら、その方向性を明らかにしようとしたと考えられます。実際に政府委員会に関与することによってどのような成果が得られたのか、また、政府委員会の議論の方向性が報告者の参加によってどのように変わったのか等については、議論の中で必ずしも明確になったわけではありませんが、報告者の参加した（している）淀川流域委員会の先進性を理解することは容易であったと言えます。さらなる論点の提出等は学会誌への投稿によって果たされることを強く希望する次第です。

### 2. 秋山コメント

一方、仁連報告のコメントとして発せられた秋山報告は、実はこうした水資源政策、河川政策の転換を、研究者としてどのように位置づけ、評価するのかといった視点の強い報告であったと考えられます。筆者は、秋山氏のコメントを、これまでの水利研究の成果などを踏まえて考えた場合、河川政策から水循環政策への転換を既存研究成果の蓄積の中でどのように位置づけることができるのか、また、そうした研究からの位置づけが問題の実態把握、政策への示唆を通じてどのような有効性を発揮できるのか、という問いかけ

と理解しました。

このような理解を前提に仁連報告、秋山コメントを捉えた場合、仁連報告は現実の河川政策の展開過程の実態報告を中心としたものであったため、必ずしも秋山コメントとうまく整合したものととはなっておらず、一方、秋山コメントは、仁連報告をベースにしたコメントというよりも、独立した1つの報告となっており、その内容自体、改めて議論されるべきものであるように考えられました。既存研究成果から現実の問題、現象、政策の推移を評価する作業は研究の継続性の中で最も重要な作業の1つであると考えます。しかし、今回の研究会では時間制約などから、必ずしも全面的に展開できたとは思われません。仁連報告同様、学会誌でのさらなる論点提出を希望する次第です。

### 3. 討論と感想

仁連報告、秋山コメントの後、研究会に参加したメンバーによって討論が行われました。討論では仁連報告を中心に、既存河川政策、水資源政策が今後どのように変わっていくのか、また、淀川流域委員会をはじめ、河川政策の転換のきっかけが、たえず関西から発信されているように思われるが、その理由は何か、などがフロアから投げかけられました。

現在はまさに河川政策、水資源政策の転換の真っ只中にあり、国土交通省をはじめ、政府諸機関の動きが決してわかりやすくはなく、また、地域的にも一様でない中において、その方向性を明確にする（させる）議論は極めて重要であると考えられます。

そうした中、筆者が最も気になっているのは、政府政策がこうした地域性を伴いながらも、河川政策から水循環政策への転換を遂げようとしていると理解した場合、そのとき、ダムや河口堰は水循環政策の中でどのような評価を受けることになるのだろうか、ということです。水循環政策の中身に関する理解はまだまだ多様であり、共通見解に達しているとは考えられません。恐らく、これまで水資源政策、河川政策の中では必ずしも適切な位置づけがされてこなかった地下水を水循環政策の中に取り込んでいくこと、また、河川管理の限界の中で流域の土地利用にまで踏み込んでいくことなどは大方の同意を取り付けることができるだろうと思います。しかし、これまでの河川政策、水資源政策をリードしてきたダム・河口堰に対してより適切な位置づけ

をしていく作業が、水循環政策への転換を遂げる際に何よりも求められているというのが筆者の考えです。この点については更なる議論を学会の中でしていきたいと考えています。

以上、全体の議論の展開を跡付ける作業もできていない報告となりましたが、2003年度冬季研究会の報告とさせていただきます。

～ 新規加入会員案内 ～

個人会員

敬称略

会員名	所 属	専 門 分 野 等
佐藤 洋一	日本大学工学部	閉塞性水域の富栄養化の抑制
柏木 正隆	京都工芸繊維大学大学院	河川の自然浄化

知り合いの方にぜひ、水資源・環境学会への入会をお勧め下さい。

学会事務局からの案内と連絡

**原稿募集！**

学会誌「水資源・環境研究」への投稿を募っております。次号の締め切りは、8月31日です。投稿規程や執筆要領は学会誌の巻末にあります。投稿希望の方は、学会誌巻末のエントリーシートを下記担当理事までご送付下さい。次号の内容をさらに充実させるべく、皆さまのご投稿をお待ちしております。お問い合わせなども下記までご遠慮なく！

学会誌編集担当・事務局 野村 克巳  
 連絡先(自宅) 〒659-0012 芦屋市朝日ヶ丘町8-7-610  
 電話 & F A X : 0797-34-4785 E-MAIL : nomnom@hi-ho.ne.jp

**連絡先に変更はございませんか？**

学会事務局では2004年度会員名簿を作成しております。所属先、連絡先等、変更がございましたら下記学会事務局までご連絡下さい。

**E-MAILアドレスをお知らせ下さい**

電子メールによる情報提供やお知らせ等ができるように準備をしています。電子メールアドレスを下記学会事務局まで電子メールにてお知らせ下さい。

学会事務局 仁連 孝昭 〒522-8533 滋賀県彦根市八坂町2500滋賀県立大学環境科学部内  
 TEL : 0749-28-8278 E-MAIL : niren@ses.usp.ac.jp

発行:水資源・環境学会

〒522-8533

滋賀県彦根市八坂町2500滋賀県立大学環境科学部内

電話 0749-28-8278 Fax 0749-28-8348

HP更新中!

<http://www.soc.nii.ac.jp/jawre>